

LECTURE

講演会報告



ギター・マンドリンクラブは毎年3学期末、1年間の活動を集大成として定期演奏会を開いています。昨年度の第40回定期演奏会は創部50周年の記念の年とも重なり、3月22日(木)に愛知県芸術劇



ギター・マンドリンクラブ 創部50周年記念第40回定期演奏会

場コンサートホールで開催しました。創立当初は音楽系クラブの種類が限られていたこともあり、高校生だけで100人以上が所属する大所帯でしたが、クラブの数が減るにつれ、一時的に部員が減少した時期もありました。しかし約10年前から中学生も入部できるとなると、現在は中高合わせて100人近くの部員が在籍し、活発に活動しています。

創立以来、上級生が下級生に確実に技術を伝えていく伝統があり、第25回以降の5年ごとの節目の定期演奏会では、OGとの合同ステージも企画しています。今回も70人以上のOGが昨年11月からの合同練習に参加し、当日の舞台上には高校生と合わせて約120人という幅広い年代の先輩後輩が出演。気持ちを一つにしての演奏に、改めて伝統の重みを実感しました。

学内、学外から1000人以上の観客に来ていただき、あちこちで再会を喜ぶ同窓生の姿も見られました。



作家の重松清氏を迎え 文化創造フォーラム

文化創造学部では発足以来毎年学外から著名なゲストをお招きする「文化創造フォーラム」を行っています。表現文化専攻主催の文化創造フォーラムでは、昨年の町田康氏に続いて、今年度は1月18日に作家の重松清氏をお迎えしました。

超多忙な人気作家である重松氏は、この日も徹夜明けで名古屋に入り、講演後もテ

レビ局と打ち合わせが待っているという過酷なスケジュールの中を、わざわざ本学のために来てくださいました。300人以上が入るはずの会場の教室は、通路はおろか壁際までびっしりと聴衆で満たされました。学外からの来聴者も多数おられました。

重松氏の講演タイトルは「言葉の力」。ゆつくりとした温かみのある声で、言葉の多面

性、危険性、そして可能性についてお話されました。創造の「創」の字には傷の意味もある。傷つくことから生まれるものもある、というお話は特に印象が深いものでした。ふだんはメディアでの活躍を通して知るだけの作家が、生の言葉の重みと人柄の魅力に接することができて、学生同心から満足したに違いありません。

2月13日から17日にかけて、名古屋市民ギヤラリー栄において都市環境デザインコース卒業研究展が開催されました。昨年度卒業生による卒業制作20点、論文13点のパネル、模型が展示され、5日間の期間中に711人の来場者を見ました。学外展も今回で5回目を数え、一つの区切りを迎えた感があります。展示もゼミごとに整理され、出展者の顔写真入りのパネルを入り口に掲げて、例年に比べて見やすい展示となっていました。

出展作品は、全体として大きな模型が増えたこと、図面のプレゼンテーション技術の向上が感じられました。例

都市環境 デザインコース 卒業研究展2007



年通り学内展において教員による投票が行われ、卒業制作から3点、論文からは3点の優秀作品が選ばれました。来場者のアンケートには、「毎年見に来ていただいている方の感想もあり、年々レベルが上がっているの嬉しい」と指摘も数多くいただきました。学生、教員、助手それぞれの努力が次第に実を結びつつあることを実感した展覧会でした。これに甘んじることなく、さらなる質の充実を目指してゆきたいと思えます。

医療福祉学部福祉貢献学科3年の向瀬千都子さんが3月19日、名古屋市女性会館において同館主催の点訳ボランティア研修会の講師に招かれ、「学ぶ喜び 広がる世界 見えない壁をうちやぶって」と題した講演を行いました。会場は1000人を超える参加者のために、補助椅子席も設けられる盛況ぶりでした。

向瀬さんは小学5年生のとき突然、視覚に障害を受け、盲学校に進みます。卒業後は鍼灸マッサージの治療院を開き、多くの患者さんの治療に当たってきました。一方、大学で学びたいという夢をかなえるため、通学圏にある多くの

福祉貢献学科3年の 向瀬さんが 女性会館で講演

大学の受験や受け入れの可否を数年にわたり調べ続けましたが、いい返事はもらえなかったそうです。それだけに本学の社会人入学試験の受験が認められ、合格の通知を受け取ったときはとても嬉しかったです。

入学当初は通学経路や校舎施設の場所を覚えるだけでも大変で、体調を崩したこともあったそうですが、現在は教職員を始め同級生、ボランティアの学生、さらにNPO団体のスタッフなど、多くの人の協力を得て大学生生活を満喫しているとのこと。また、好きな料理や一人旅など趣味についてのユーモアにあふれた体験談は、聴衆に深い感銘を与えました。

